



イチゴ果実に対するアザミウマ類の加害能力の違い

長崎県農林技術開発センター 環境研究部門 病害虫研究室 たか だ ゆう じ
高 田 裕 司

はじめに

イチゴ産地ではアザミウマ類による果実被害が深刻化している。これまでの防除対策は収穫期における殺虫剤散布が中心であったが、近年の気候温暖化の影響による春季（3～5月）のアザミウマ類発生量の増加、ハダニ類に対する天敵農薬の普及、ミツバチなど訪花性昆虫の導入により使用可能な化学農薬が制限されることからアザミウマ類に対する十分な化学農薬の防除効果が得られず、果実の商品価値低下や収穫の早期終了を招く事例も報告されている（梅谷・岡田，2003）。

主要な加害種として、ヒラズハナアザミウマ（*Frankliniella intonsa*）、ミカンキイロアザミウマ（*Frankliniella occidentalis*）、チャノキイロアザミウマC系統（*Scirtothrips dorsalis* strain C）、ネギアザミウマ（*Thrips tabaci*）などが挙げられ（図-1）、それぞれの種・系統がイチゴ果実へ及ぼす加害能力や被害様式には違いが存在することが示唆されてきた（柴尾，2016）。

従来、イチゴにおけるアザミウマ類の防除方針や要防除密度は主としてヒラズハナアザミウマを前提として示されてきた（藤本・松本，2003；春山ら，2013）。しかし、

生産現場においては他種が優占している圃場が存在することや、近年、チャノキイロアザミウマC系統の侵入・定着が明らかとなり、各種アザミウマの加害能力や生態の違いを詳細に検証する必要性が生じている。

本稿では、長崎県内の主な発生種である、ヒラズハナアザミウマ、ネギアザミウマ、チャノキイロアザミウマC系統の3種のイチゴ果実加害能力を比較した試験結果を報告する。

I 被害の実態

本県のイチゴ圃場で発生する主なアザミウマ類は、ヒラズハナアザミウマ、ネギアザミウマ、ミカンキイロアザミウマである。2023年に本県産地の13圃場で実施した調査結果では、圃場間で種構成は異なり、収穫の終盤にあたる5月上旬から下旬にかけて調査した結果では、ヒラズハナアザミウマが全圃場で確認され、優占している圃場が13圃場中10圃場で最も寄生頭数が多かった。また、ネギアザミウマは広範に分布するものの、寄生数は比較的少なく、ミカンキイロアザミウマの発生圃場は少なかった（図-2）。なお、本調査では確認できなかったが、長崎県内の一部イチゴ圃場でチャノキイロアザミ



図-1 イチゴ果実を加害する主なアザミウマ類

Comparative Damage Potential of Thrips Species on Strawberry Fruits. By Yuji TAKADA

（キーワード：イチゴ、果実被害、アザミウマ類、加害能力、要防除水準）